

大相撲観戦 あ・と・し・ま・つ
平成 26 年 5 月場所を終ったところでひとこと

<1> 久しぶりの三横綱体制

鶴竜の横綱昇進によって、久しぶりに三横綱体制となった。三人三様にどことなく不安感を感じさせる土俵が見えたが、さすがに白鵬は締める所は締めていた。

白鵬が相撲をとった後は、土俵上に摺り足の足跡がきれいな連続した曲線を描いて残るのが常だが、今場所は何日か「ぶつ切りの足跡」が見えた日があった。想定外の展開になった時にも臨機応変のスピーディな対応がとれるのが通常である白鵬に、「通常でない日」が見えた。

また勝ち名乗りを受けて懸賞金を手にした時に、懸賞金を持った右手を高らかにかざす日が何日かあった。おそらく、三横綱体制になりはしたが、「俺がトップであることは変わらないぞ！」と宣言したい気持ちが心のどこかにあるのではないかと読みとった。

この読みは的中していた。千秋楽の優勝力士インタビューで、白鵬は今後の抱負をこのように語っていた。

「相撲の世界には金の扉がある。この扉を狙う若手の前に壁となり立ち向かいたい」

日馬富士は相変わらず「どこかに痛みを抱えている相撲」を感じさせたが、さほどの崩れはせずに千秋楽に辿り着くことができた。

鶴竜は 9 勝 6 敗、横綱として初めての場所で気負いも緊張もあり本来の力を出せていたかどうかわからない。いずれにせよ来場所の成績によっては俄かに向かい風が吹くことになるだろう。

そんな次第で、後半になってから稀勢の里の粘りがありはしたものの、白鵬が 14 勝 1 敗で 29 回目の優勝を果たして幕を下した。

優勝決定が千秋楽にもつれ込むと言う素晴らしい展開も手伝って、久しぶりに盛り上がりのある場所だった。

<2> 稀勢の里と琴奨菊

稀勢の里は全体としては落ち着いて相撲が取れている日が多かったが、腰高で上半身に力が入った不安定な取り口が目立った。それでも 13 勝 2 敗の成績を収めることができたのは、地力がある上に落ち着いていたことによるものと見た。千秋楽まで優勝戦線に加わっていたことは充分評価に値する。

この腰高が是正できなければ安定した成績の持続は難しいと私は見ており、今更是正が可能とも思えない。来場所の成績次第ではまた「綱取り」騒ぎが始まるのかもしれないが、私見としては（世間の騒ぎとは逆行するかもしれないが）、あまり綱に拘ることなく「名大関」の称号でも悪くないのではないかと考えている。琴奨菊の 15 日間は、「勝ち越しは難しいだろうな」と思わせるような内容だった。5 勝 10 敗、特にコメントのしようもないが、来場所は万全の体調で臨んで欲しいと切望するのみである。来場所は論理的には 8 勝 7 敗以上の成績で良いことにはいるが、昨今の環境から見てその程度の成績では許されないだろう。

<3> がっかりした関脇

本来は場所を面白くする役割となるべき東西の関脇が、いずれも不在のような印象の場所だった。

二年も関脇の地位を守っていながら、その先に抜け出せない豪栄道は今場所も同じように千秋楽に辛うじて勝ち越すという薄氷を踏むような 15 日間だった。

先手を取れる相撲は数少なく、相手の攻めに応じて色々な手を繰り出して応酬するが、押し込まれてくると叩いてしまう悪い癖。結果として、「これが豪栄道の相撲だ！」という勝ちパターンが出来上がってこない。大関にはなれなかったが「名関脇」だった力士は過去にも沢山いるが、今の豪栄道には「名関脇と言われる相撲」にも程遠いような気がする。

栃煌山も予てより「次の大関候補」として話題になることが多い力士だが、「両差し狙い一本やりで、それが叶わなければ無様な負け方」では勝ち越しもおぼつかないのは明らか。なのに「大関候補」と騒ぐ人の眼力

が理解できない。この場所は10勝5敗の成績をあげはしたが、「ここに栃煌山ありという存在感」が感じられない。栃の煌めきはいつになったら実現するのだろう。

<4> 注目された小結だが

21歳の千代鳳と32歳の嘉風が並ぶ東西の新小結は注目の的となった。

千代鳳の引き下がらない相撲、叩かれても前に落ちない相撲、攻められても簡単には土俵を割らない相撲などが注目を浴びてきた。まだ壁に跳ね返される段階で、好成績をあげることよりも「何勝できるかな？」ということの方が興味のポイントだった。鶴竜・琴奨菊を破って5勝10敗の出来映えは「よくやった」という評価だろう。「跳ね返されて何を学習したか？」来場所以降にその成果の有無を観察したい。

嘉風は、一番の取り組みに持てる力を出し切る気持ちの良い相撲で、勝っても負けても館内を湧かせる。

「勝ち負けは別として、お客さまに喜んでもらえる相撲を取りたい」という本人の弁のとおり、時には血を流すほどの奮闘ぶりで、初日に日馬富士を破り6勝9敗の成績は充分拍手に値する。

若い頃には、足が土俵に着いていない上に必要以上の動きばかりをして自滅する相撲が多かったが、近年お客さまに喜んでいただける以上に自分が満足できる結果を得られるようになってきた。体全体を使って奮闘すれば必ず結果が付いてくる、その結果として32歳で小結の座を手に入れた。小手先の細工ばかりを身に付けてしまう中堅力士は見習ってもらいたい。

<5> 目立った力士達

今場所際立った相撲を見せたのは勢。ここ数場所の足取りを見ても、成績以上に相撲の内容が毎場所進歩し成長しているのがわかる。右四つの型を持っており、さらに立ち合いにスピードが付いてきた。流れの中で相手の攻めに応じてスピーディに対応できる能力も備わり、期待されていた以上の成果をあげた。これまで番付運が悪く三役入りを逃したこともあったが、今場所も西五枚目で11勝4敗の成績をあげながら他の力士の成績との関係で昇進は難しそうだ。着実に身に就いてきた実力から見て、近いうちに昇進が可能なレベルにきていることは確かである。

敢闘賞を受賞した新入幕の佐田の海は、遠藤同様にきれいに足が上がる四股と基本が身についている感じの土俵上の身のこなしで、爽快な相撲を取る。「親子二代の関取」「親子二代の新入幕敢闘賞を！」というマスコミの騒ぎ立て方が煩かったが、結果は10勝5敗で相撲記者クラブの自作自演のドラマに乗り敢闘賞となった。重心が低い所にある佐田の海の相撲の長所に反して、度々見せる外掛けは重心が高く不安定になる結果を招き、外掛けが決まらなかった時には自滅する恐れがある。また立ち合いに土俵上に手を下したかどうかかわからないような、かなりすれすれな「チョンつき」も、改めた方が良い。

東5枚目の松鳳山は8勝7敗ながら、相撲内容に目を見張るものがあった。新入幕当時は背伸びするような突っ張りで失敗することが多かったが、ちょうど良い高さの突き押し、しかも短い周期で連発し続ける速さと前進力との組み合わせで効果的な突き押しができるようになった。三役の壁に突き放されている現在だが壁を突き破る力を身につけつつある。

北太樹は豊真将とともに土俵上の所作がきれいで、しかも相撲にけれん味がない好感度力士である。怪我も回復してきたようで、9勝6敗の成績をあげた。左四つの磨きこまれた北太樹スタイルがあり、旨さと渋さとが入り混じった幕内中堅・上位で活躍し続けて欲しい魅力的な力士だ。

大砂嵐は東前頭10枚目まで躍進し、そろそろ二度目の壁に跳ね返される時期ではないかと思っていたら、10勝5敗の成績をあげてしまった。相撲の基本を少しずつ覚えつつあるが、力任せの相撲を覚えてしまったから基本に帰るのは大変な事だろうと思う。力強い突き押しはあるが、腕力だけでやっている感じで重心の前への移動がスムーズではない。立ち合いの強烈なちあげで相手を威圧する戦法をとることが多いが、二の矢、三の矢が不完全なことが多く、ちあげで伸びきった体とガラ空きの脇を攻められればこれでおしまいになるので、先々を考えるなら止めた方が良い戦法だろう。来場所は横綱大関とも顔が合う地位に上がるので、どんな結果になるか？

白鵬・稀勢の里に次ぐ館内の声援と拍手の大きさ、遠藤は国技館の中心人物になりつつある。横綱大関とま

ともにぶつかる前頭4枚目まで躍進し、今場所の出来映えに皆が注目した。低い腰の位置、きれいな摺り足、立ち合いに素早く取れる前みつ、攻められた時に見せる応変の対応力、基本がしっかりしているという点で安心感がある。しかしながら、立ち合いに素早く矢のように突っ込んでくる力士にことごとくやられて、惜しくも勝ち越しはならなかった。私の見方としては、ほぼ順当な出来栄え（つまり「よくやった！」）という印象である。立ち合いの工夫と改善が今後の課題であろう。来場所どの位改善策がとられるだろうか、楽しみである。

<6> 熱戦増加面白かった今場所

今場所は熱戦が多かった。簡単に土俵を割るのではなく、攻められたら攻め返すという葛藤のある取り組みが多く、館内の声援も久しぶりの高さだった。また、叩き込みのつもりが「まげつかみ」の反則負けになる取り組みもあったが、激しい攻防の結果の珍事もあり目が離せない熱戦を数多く見る事ができた。

◆その1：物言いとその説明

物言いがつく取り組みは、テレビで見ている方がその細かな経緯までが解って解りやすい。私も経験があるが、国技館で観戦しているお客さまには多くの場合「物言いがついた取り組みのきわどい瞬間」がわからないまま、協議の時間が空白として目に入るだけである。そして、審判長からの説明の技量にもよるが、ほとんどの場合「結果が示された」だけのことで何も面白くない。審判長の説明の仕方のスキルアップもしてほしいが、同時に「物議を醸した瞬間の映像（スローモーションビデオなど）」を館内にも映し出すことで、観客にも退屈させずしかも納得感を与える説明の補助策とする必要があると感じた。

◆その2：白鵬の物言いと反則負け

「まげつかみ」による「反則」となった勝負が近年目立ってきた。今場所は12日目の豪栄道・鶴竜戦、14日目の稀勢の里・日馬富士戦で発生した。14日目の事件は、控え力士の白鵬が物言いの手を上げた。結びの一番、土俵際で詰め寄る稀勢の里と俵を後にして叩きこんでかわそうとする日馬富士。勝ち残りの控えにいた白鵬が手を上げた。土俵際の攻防の中で勇み足か踏み出しでもあったのかなと思っている内に実態がわかってきた。「日馬富士が稀勢の里のまげを掴んだことにより反則負け」ということだった。「控え力士も物言いをつけられる」ということは知っていたが、実行した力士を目の前で見たのはこれが初めてだった。これはもっと広まるべきことではないかと思うが、控え力士としては精神統一の大事な瞬間なので、白鵬が勝ち残りゆえにそれが可能だったのかもしれないが……。

◆その3：これは珍しい出来事

6日目の西方幕内力士の土俵入りで先導役の式守錦太夫が勤務予定を失念してしまい、先に東方の先導役を済ませたばかりの木村恵之介が駆けつけて代役を務めたという不名誉な珍事があった。

10日目の千代鳳・豪風戦では土俵の上で前代未聞の珍事が発生した。突き押しの攻防の後、千代鳳が豪風の首筋を叩いて勝負がついた。ところがこの時、左の足を大きく踏み込んで前のめりになる豪風が、第一指の先を行司木村玉光の袴の裾の飾り紐に引っかけてしまった。前に倒れ込む豪風の足が空を切るとともに、足をすくわれた木村玉光が旋回して転倒。行司が倒れながら軍配を離さずに両力士の着地の様子に視線を送っていたのが印象的だった。やや遅れて映し出されたスローモーションビデオは、「豪風の足の指に引っ掛かった行司の袴の飾り紐」を鮮やかに記録していた。行司という仕事は命がけの仕事だ。

		
<p>① 千代鳳の叩きに大きく左足を踏みこんで前のめりこむ豪風</p>	<p>② 倒れる豪風の後で転倒する行司木村玉光</p>	<p>③ よく見ると、豪風の左足の指に引っ掛かった行司の袴の飾り紐</p>

<7> 最後にひとこと（騒ぎの中に潜む落とし穴）

大相撲関係者やマスコミは、何とかして稀勢の里の横綱昇進を実現させたがっている。前述のように、私見としては冷静な観察の範囲である。

もしも、世間が望むような結果が得られたら・・・、どんなことになってしまうのか？ またどのような新たな課題が現出するのか？ について述べて見たい。

稀勢の里の横綱昇進が実現するとすれば、最速でも平成26年九月場所後ということになる。その時にもう一人の大関琴奨菊はどうなっているだろうか。相変わらずの一進一退の状態かもしれないし、悪くするともう大関から陥落しているかもしれない。

この時期までにもう一人の大関が誕生しているかどうかを考えて見ると、今の豪栄道・栃煌山の状態から見るとどう考えて見ても否定的にならざるを得ない。

つまり、最悪のケースを考えると「四横綱一大関」または「四横綱ゼロ大関」となってしまう可能性がある。稀勢の里の横綱昇進ばかりに目を向けて騒いでいるが、その結果としてどんな事が起きるのかまで考えておかなければいけない。

豪栄道と栃煌山にはもう期待できないとして、次に続くものが見当たらない。さりとて昨今話題になっている遠藤や佐田の海が大関を狙えるようになるのにはまだまだ道は遠い。

今になって「鶴竜の横綱昇進を焦らない方が良かったかな・・・」などと言っても始まらない。

相撲協会及びその関係者の中に、この後継者育成問題を深刻に考えている人はどの位いるだろうか。昇格基準・降格基準などとも合わせて考える必要があり、急に考えても答が出せない重大な問題である。

以上